

日本民藝館の館長になるということ

深澤 直人

アメリカに渡る前に日本民藝館を訪れた。三十歳の頃だったと思う。帰りの切符を持たない旅立ちの前になにか日本的なるものを見据えておきたかったのかもしれない。そのときに手渡された小さなパンフレットに書かれていた、「民藝」とはなにか、その概念と民藝館設立に至った経緯や趣旨、柳宗悦の民藝運動への志、そして「民藝」という言葉自体を生み出したことなどにいたく感動した。「民藝」はそのまま「デザイン」のことではないかと思った。デスクの前にそのコピーをずっと貼っていたことを憶えている。アメリカでの七年半はシリコンバレーで先端のデザインに浸る日々の暮らしにあって、なお日本の美学を必死に学んだ。遠くにいて日本を思う自然な気持ちだったと思う。今思えば若きデザイナーにとって社会へ出て最初の十年間は世界のデザイン事情に揺らされて船酔い状態だったと思う。だからなお柳宗悦の哲学は揺れのなかですがる軸のようなものだったのかもしれない。

日本に戻り、「ふつう」とか「日常」のなかにデザインの美学が必要なのではないかと気付いたとき、スペシヤルなデザイナーに成るために自分から湧き出るものはなんなのか、というような気負った気持ちが無くなってしまった。それと同時に美しいものや正しいものの存在がわかるようになった。「古典」や「新しさ」というよりも、長い間淘汰

されずに今も生活の中で変わらず活かされているものの強さや普遍とはなにか。その不変項を見出し、むしろいいものを生活の変化に合わせることで微修正していく作業がデザインではないかと思うようになった。ものは生まれたときからいいものとは気付けない。いいものに成っていく要素を持ち合わせたものとはなにかを自分に問いかけながらデザインする日々が続いた。柳宗理のデザインがなぜ現代の生活にしみ込んでいくのか、その強さや、手で生み出していく道具の極みのようなものの存在の偉大さにも圧倒された。自分にもできるだろうかと思いが奮い立った。

そうこうする日々のなかで昨年暮れに柳宗理が九十六歳の人生を終えた。まさに「民藝」と「デザイン」に橋を架けた存在の死は衝撃だった。工業デザインという存在もなくなってしまったようにさえ感じた。その数ヶ月後、三宅一生さんから、日本民藝館の館長をやりませんかとお声をかけられた。正直驚いた。同時に、今まで自分が歩んで来た道がここまで繋がっていたのか、とあらためて感慨深かった。気持ちは動き、三宅一生さんと親しいご友人の岡崎真雄理事長と石丸重尚常務理事の正式な依頼をお受けした。しかし「民藝」と「デザイン」との隔たりを感じている人の声や、「なぜデザイナーが民藝館長に？」といった声を想像すると戸惑いはあった。一度はお受けしたものの熟慮の末お断りした。

私の中では「民藝」も「デザイン」も美しいものをつくる、魅力を生み出すこと、に変わりはないが、デザインという一般概念は「民藝の美学と哲学」から見れば軽く見えるのではないかという事は拭きできなかった。しばらくしてふと思った。もし私がデザイナーとい

う名をもって民藝の世界に寄ってみることで、双方の隔たりのようなものを取り去る力にならないかと。それはデザインにとっても民藝にとっても、やや凝り固まった双方の偏見を和らげる力になれないかと。その後、まずは民藝館の現場に近い学芸員の方々と直接お話をしたい旨を伝え、正直な思いを語り合った。柳宗悦の哲学に心酔し、研究を重ねる方々との思いのズレはなかった。むしろ新しい仲間として一緒に日本の宝箱のようなこの場所を守っていこうという意志が強まった。この場と集められたものが発する価値を静かに語り広げられればいいなど思い、館長になることを決めた。

今まで館長と理事長の立場で民藝館を守ってきたいただいた、小林陽太郎さんからの正式な依頼を受け、バトンを受け取った。

柳宗悦が「民藝」という名を興すべきと思いついたその意志と時代背景は、特別なものと思われすぎて、生活の中に活かせる美の存在を忘れかけている現代のデザインと重なるような気がしてならない。日常品の中から、忘れそうなほどあたりまえなものを集め再提示してみる「Super Normal」という活動を友人のデザイナーの Jasper Morrison とともにやってきたことや、「Found MUJI」と名付けた世界中で長く愛されてきた無名で単純で愛着のあるふつうのものを探し出す旅も、思えば現代の「民藝運動」に近いようにも思える。

七月一日の館長就任後、蔵に入り一万七千点にも及ぶ収蔵品の一部を見たとき、一つの言葉が頭に浮かんだ。「かわいらしさ」だった。洗練とか綺麗というよりも、もっと人間に寄り添ってくる「愛着、愛ら

しさ」のようなものがすべてから感じとれた。これは作家の意図やエゴや主張とは異なる、無心の愛がかたちになったものだと思った。

作り手の手が自我を超えて客観になりきること自然にわき上がった。愛のかたちに深く感じ入った。生活の中の素朴な美を、埋もれそうなかから探し出す目も、人間の生の美学の根源に関わる小さな点からの広がりを感じる力に違いない。

民藝館はこれからも変わらず人の心のよりどころである。

人々（民）が共有する念ねんいを守り伝えていく仕事を館長としてやっていこうと思う。（二〇二二年九月）

〔深澤直人氏略歴〕

1956年 山梨県生まれ

1980年 多摩美術大学プロダクトデザイン学科卒

1989年 渡米、IDEO入社（九六年より東京支社長）

2003年 NAOTO FUKASAWA DESIGN 設立

受賞歴多数。現 21_21 Design Sight ディレクター、武蔵野美術大学教授など。